

ユニバーサルデザインを住民参加で推進する方法*

The method to promote Universal Design by collaboration between the citizens and the government*

田中智麻**・安藤良輔***・小沢美博****

By Chima TANAKA**・Ryosuke ANDO***・Yoshihiro OZAWA****

1. 研究の目的と背景

バリアフリー基本計画策定や整備が進められる過程において住民参加が各地で取組まれている。豊田市においても、平成 16 年にユニバーサルデザイン基本構想を策定するにあたり、市民と共に課題を抽出するワークショップ、P I などの方法で市民意向を反映し、公共交通や施設、街路など誰もが使いやすいまちをめざして取り組んでいる。

しかし、課題抽出に始まり整備の検証、改善のためのなど住民参加で取り組みがされているものの、その評価方法や継続の仕組みを作る段階では課題が多い。

本研究は、ユニバーサルデザイン基本構想策定時の市民参加を整備段階における参加に展開させ、継続していく仕組みを考察する。整備段階の参加手法として、高齢者や障害者を含めた生活者の視点から整備状況を検証し、より多くの市民に情報提供するためのユニバーサル・タウンマップ作成ワークショップを実施した。基本構想によりすすめられている整備が、多くの市民が享受できるよう市民参加で検証して情報提供するというものである。

第 2 章でその実施経緯について述べる。

第 3 章で実施過程を通して得られた成果と課題を考察し、第 4 章ユニバーサルデザインを住民の視点で推進する方法について論じる。今回の取組みを第一段階として、どのようにマップを活用していくのか、政策への反映の手法など展開に向けて考察する。

2. ユニバーサル・タウンマップの作成

豊田市のユニバーサルデザインによる検証を行うために「ユニバーサル・タウンマップ」作成ワークショップを実施した。豊田市ユニバーサルデザイン基本構想の 5 つ

*キーワード：市民参加、市街地整備、歩行者・自転車交通計画

**正員、工修、(財)豊田都市交通研究所

TEL0565-31-7543、FAX0565-31-9888、tanaka@ttri.or.jp

***正員、工博、(財)豊田都市交通研究所

****豊田市都市整備部交通政策課

の基本方針のうち、本事業では特に、2)訪れる人にやさしく回遊しやすいまちづくり、5)利用者のモラル向上や助け合いなど心のバリアフリーの推進、を目指す(図1)。そのための道案内ツール作成を行うと同時に、地図づくりを通して他者の不便さに対する理解やバリアフリーに対する意識啓発をはかることを目的とした。本章ではその経緯を述べる。

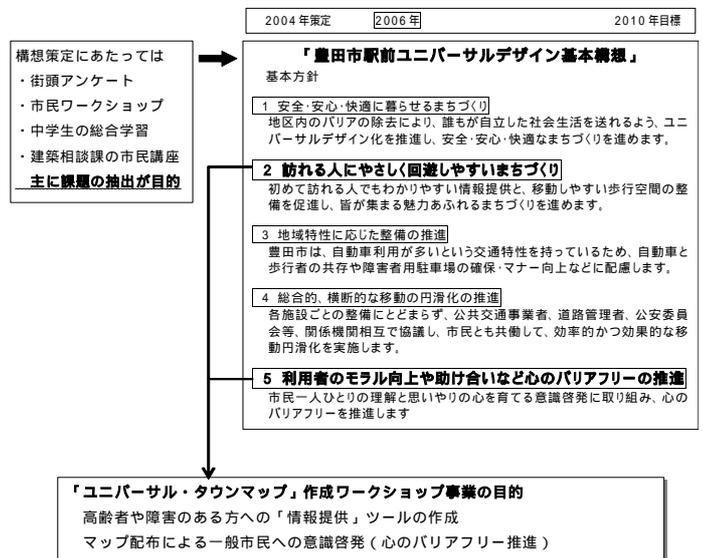


図 1 事業の目的

(1) ワークショップ実施計画の検討

本事業の企画は、ユニバーサル・タウンマップ作成実施に向けて、企画検討の段階から市民や団体へのヒアリングを通して、市民ニーズを把握した上で実施計画を立てた。(図2参照)

豊田市で活動する視覚障害者支援 NPO 法人であるつえの里や自立支援を行うユートピア若宮の会は、ユニバーサルデザイン基本構想やバリアフリーに関する事業において計画段階から多くの事業に協力している。本事業でも当事者としてこれらの団体から意見を募り、企画の段階から内容についてのヒアリングを実施し、参加者の集め方についても提案を受けた。その結果、バリアフリー化を推進するためには、障害を持つ人のみならず、中心市街地で生活する市民をはじめ多くの

人が認識を共有することが必要とされ、当初予定していたバリアフリーマップをユニバーサル・タウンマップと改めた。(図2のプロセス)

次に、参加者を募るための呼びかけとして、豊田市広報誌や報道関係者へのPRを行った。しかし、一般的な呼びかけでは関心を喚起しにくいことを考え、豊田市中心部を拠点に活動する団体などにヒアリング

を行い、諸団体の持つネットワークや人のつながりを頼って参加を呼びかけた。また、中心市街地に関する市民として、子育て支援を行う団体、商工会議所やまちづくり株式会社、豊田市を拠点に活動する学生プロジェクト、街中活性化を目指す商店主の団体、などから参加協力を得た。(図2のプロセス)

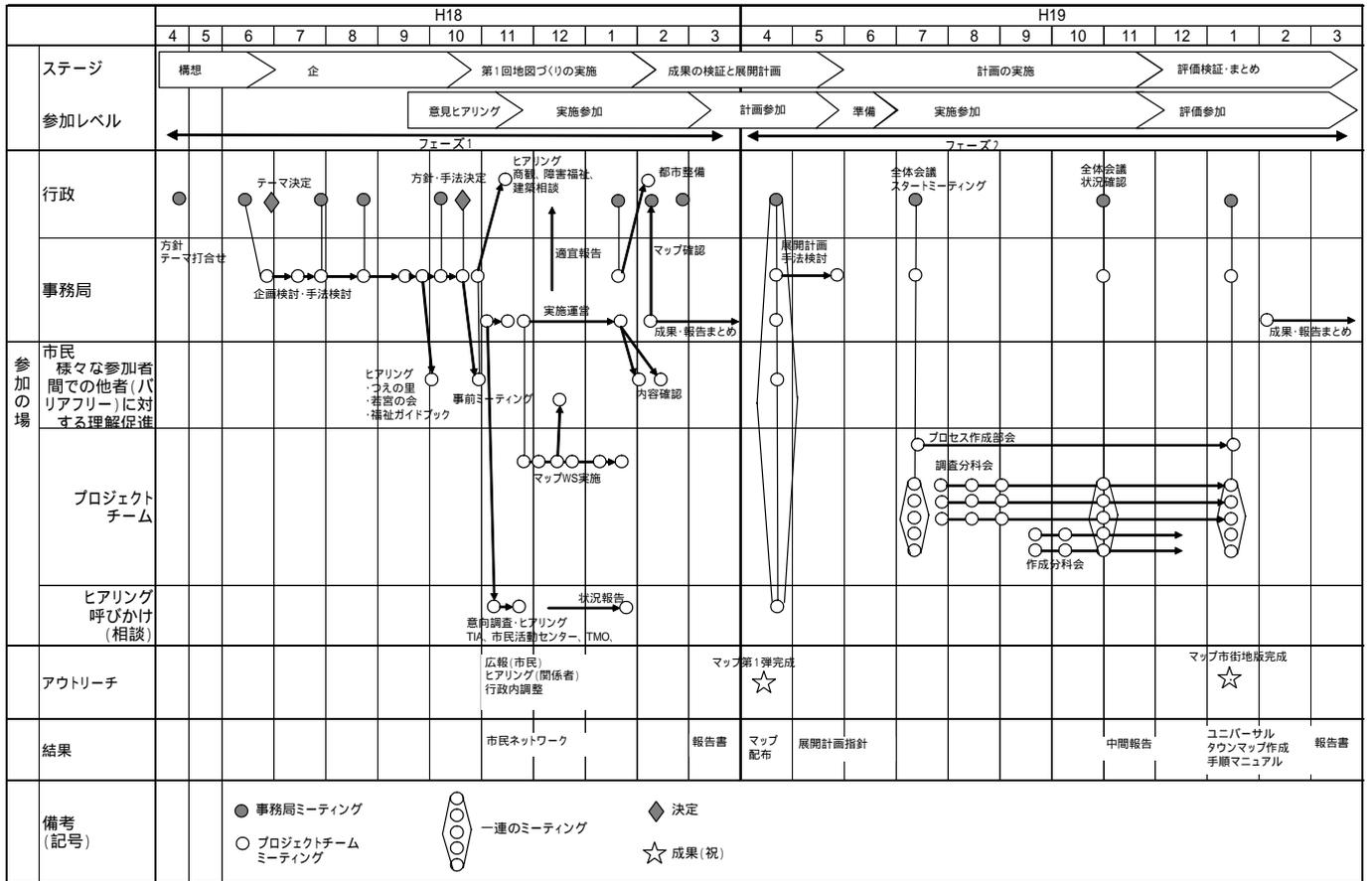


図2 事業プロセス

(2) ワークショップの実施内容

高齢者や障害者を含めた生活者が歩きやすく移動しやすい情報とは何かを検討し、どのようなルートが歩きやすいのか、様々な立場の人の視点に立って、安心して歩ける道案内のためのマップを作成した。

表1 ワークショップの流れ

回数	内容
第1回 11/25(土)	「どんなマップにするか企画しよう！」 「誰に」「どんな時に」使ってもらおうか (外国人、高齢者、子ども、車椅子、視覚障害者、ベビーカー、妊婦) どんなルートを案内するか(豊田市駅、市役所・スタジアムなど) どんな情報があると便利か(掲載情報の整理 アイコン化) 次回「取材」計画を練ろう
第2回 12/2(土)	「街にでて取材しよう！」 掲載情報を念頭に、案内ルートの情報を歩いて取材(メモと写真撮影) 戻ってきてから、取材情報を整理。地図に落とし込んで情報を補足する。
第3回 12/16(土)	「手づくりマップをつくらう！」 各班で調べた取材情報を共有しよう どんなマップの形態にするかイメージの共有(地図の内容、形状) 情報をマップに落とし込んでみよう 掲載する情報をどうやって載せるか?記号は?
追加WG 12/23、1/13	「マップデザイン」 再度マップの目的を整理して、具体的にデザインする。 豊田市のユニバーサルデザイン紹介記事を編集する。
第4回 1/20(土)	「マップ発表! みんなでディスカッション」 手づくりマップ(案)を発表、確認と修正 マップの使い方についてディスカッション、今後どうする・・・?



ワークショップは当初全4回でマップ計画、調査、作成を行うことを考えていたが、実際には1回3時間

の制約の中で、マップ作成にあたって討議することが多数あったため、2回のデザインワーキングを追加した。ワークショップの構成内容を表1に示した。

3. 事業の成果と課題

(1) マップ作成による成果

目に見える成果物

まず、本事業の成果として、「ユニバーサル・タウンマップ」第1号として形になったことが成果といえる。成果物が分かりやすく参加者以外の人に対して説明と協力を得やすいツールを作成することができたことは、参加者の達成感や継続への意欲を高めることに寄与すると考えられる。

情報ニーズの把握

マップ作りを通して、視覚障害者や車椅子の利用者、子育てしている人、外国人など、外出前や外出中に欲する様々なニーズを把握することができた。今回は、それらのニーズを一枚の地図上で網羅することは難しいため、参加者の意思決定により主に車椅子の利用者やベビーカーをひく母親など、歩行が自由でない人が対象のルート案内にした。今後は、利用者の用途に応じた情報の出し方を検討することが課題である。

整備課題の把握

マップづくりのための現場調査では、整備状況を伝えるための調査である一方、必要とされる整備上の課題が出てきた。バリアフリーな歩道であっても一箇所整備が遅れているために迂回を余儀なくされる場合、バリアフリールートとは言えず、整備の優先順位のための検討課題を把握することができた。

(2) 事業推進における成果

参加意欲ある市民の掘り起こし

本事業では、継続への意思を強く表明する参加者も多く、事務局としての役割を希望する参加者も現れた。今後、事業を拡大するにあたってワークショップなどを実施する際に核になる市民が出てきたことは参加型事業として評価できる。また、各種市民団体へのヒアリングから今後の連携の糸口を探ることが可能となった。

ユニバーサルデザインに対する意識の向上

障害を持つ人、子育て中の主婦、高齢者、学生、働き盛りの男性など、参加者が多様であり様々な立場や

視点での意見が出ていた。参加者アンケートでも、様々な視点や意見を聞いたことを評価する声が多く、市民がユニバーサルデザインというテーマに対して必要性や関心を抱ききっかけとなった。

ワークショップ手法

本事業は一貫してワークショップ形式で実施したため、ワークショップの進行手法のノウハウを蓄積することができた。参加者による検討事項の幅の設定、グループ別や全体討論の手法、時間制約の中でのファシリテーション手法、参加者の継続した意欲促進など様々な要因が事業の継続に関係してくることが認識された。今回のワークショップは土曜日の午後の開催であったため、中心市街地の店主などの出席に制約があった。今後は、より多くの市民の関心を喚起し、主体的に参加してもらうためにも、参加を希望する場（計画や検証、制作など）を考慮して、委員会、インタビューやヒアリング、アンケートなど様々な形態の組み合わせで行うことについても検討の余地がある。

(3) バリアフリー化の事業推進に対する課題

客観的な測定（整備現状、障害によるレベル差）

本事業では、参加者による整備検証を元にマップを作成した。そのため、整備された現状に照らし合わせながらも参加者の感覚で歩きやすいルートの紹介となっている。今後、今回のマップをモデルケースとして活用するには、歩道の歩きやすさを図るためには歩道アップダウンの寸法、夜間の安全性を見るための照度、事故発生箇所など、抽出された課題を現状と照らし合わせて検証し、指標化することも必要とされる。

また、今回は様々な障害や立場を抱える人が一律で利用できるようなルートを目指したが、実際には障害の事情によって整備のレベルや必要性も異なる。このようなきめ細かな課題の整理も求められる。

検証から政策への展開

本事業では、整備の認識と同時に未整備の課題の抽出を行った。また、継続するワークショップで出た話から日常生活での移動や安全に関する課題が多く存在していることが把握できた。このような問題点を抽出することはこれまでも数多くの事業で実施してきているが、課題解決方法や政策への展開を検討しフィードバックする一連の仕組みを作ることが求められる。

4. 住民参加でユニバーサルデザインを推進する方法

今回実施した事業は、ユニバーサルデザイン基本構想時に参加した市民を中心に、新たなメンバーを加えて整備の状況を検証し、環境改善を知らない他の市民に対して伝える方法を考えて情報提供ツールを制作した。今後は、改善や未整備の計画に展開し、市民のニーズに合ったバリアフリー化を推進することが望まれる。本章ではその方法について、事業が共働によって継続していくために必要な項目をあげて考察する。

(1) 継続した事業への取組み

本事業は、当初から単年度で完結するのではなく、継続した取組みにしていくことを念頭に実施していた。そのことを参加者も理解して参加していたため、参加意欲を高め、自らやり方を考案するような意識が見られた。また、今回の参加者は限定されていたが、出席できなかった関係者や商店主などには、マップの第一弾を題材に意識啓発へとつなげていくことができる。市民との協働においては、次の展開をまた検討できる余地を残すことが継続の可能性を高めると思われる。

(2) 共働の役割分担

豊田市では「共働」という言葉を用い、市民と行政それぞれが一つの目的を共有しながら市民が行う部分、行政が決定する部分、協働する部分を理解して活動することを市民参加として謳っている。共働のレベルにバリアフリー化の推進を照らし合わせたものを図3に示す。事業の構想段階である基本計画策定時には情報提供や意見収集のレベルであったところから整備検証時の市民関与を経て、更なる計画時や情報の維持管理時の協働と進展することを想定している。どの部分を誰がやるべきなのか、協働で実施すべき点はどこなのか、明確にすることが必要である。

(3) 目的とプロセスの共有化

多くの事業と同様に、バリアフリー化の推進においては行政の分野をまたいだ連携が必要である。今回は、マップづくりを目的に事業を実施したため業務上の連携は希薄であったが、バリアフリー化を推進するためには、ユニバーサルデザイン整備、サイン計画、建築計画など政策との結びつきは必須である。

このように行政内も含めて多くの人が関わる事業を推進するためには、事業の目的や推進プロセスを共有し、それぞれの役割と実施内容の位置づけが明確であることが必要とされる。

(4) 共働を推進する評価

3章で述べた本事業の成果と課題を整理したものを表2に示す。ここでは事業の評価と参加型推進と協働の評価を分けて整理した。尚、の事項は本事業の成果点、は課題を示している。協働で事業を推進するにあたっては、協働による事業への寄与を評価することにより、行政担当のモチベーションも高まるとともにこういった協働を目指すべきなのか検討課題も見えてくるであろう。

表2 事業の評価

	事業の評価		推進の評価			協働の評価			
	事業目標	効率	費用対効果	組織力	推進・連携	外部協力	手法	目的達成	継続性
内部評価	整備計画の把握 + 整備された箇所の把握、情報整理 + 整備予定の箇所の抽出 情報ニーズの把握 + どのような情報が必要か + 立場により違う情報提供ニーズの把握 ユニバーサルデザインに対する意識向上 客観的な測定 整備状況、障害による問題の差			ワークショップ手法の構築 + 参加者、非参加者への継続した情報提供により協力関係を築いた + グループ別WSのよ、悪い点 + WSの内容によっては討論の焦点がずれることがあった + 時間の制約により、地図デザインの大半は事務局で決定			参加意欲のある市民は居る + 参加者の実施ノウハウの習得でリーダーへの可能性がある + 実施内容を参加者でほぼ決定することができた + 参加者を募るために巡回班のヒアリングを行い協力関係を築けることができた + 一般公募による参加者が少ない(広域の方法? テーマの選定) + 中心市街地の住民の参加が少ない(当事者)		
外部評価	マップとしての形になった + 行政からの事業目的とマップアップ型テーマ決定のずれ(市民からの課題抽出が前面に打ち出されてない)			+ 施設ガイドブックとの内容の連携 + 業務連携のつながりが弱い + 担当者レベルの意思と行政組織内の認識のずれ			+ ユニバーサルデザイン啓発の課題が見えてきたこと(具体的な情報交換が必要)		
第三者評価							+ ユニバーサルデザイン整備の検証課題の参加手法の構築		

5. おわりに

今回の参加者からは、立場の違う人への理解から街を見る目が変わってきたという感想が多くあげられた。まちづくりのユニバーサルデザインは、ハード整備とともに住民が必要性に気づき意識を高めるといったソフト的な啓発も重要である。今後は、更に多くの市民が関心を持ち、ユニバーサル・タウンマップからユニバーサルタウンづくりへと発展することを期待したい。

参考文献

- 1) 高田邦道編著；交通バリアフリーの実際，共立出版，2006
- 2) 岡本耕平・若林芳樹・寺本潔編；ハンディキャップと都市空間，古今書院，2006

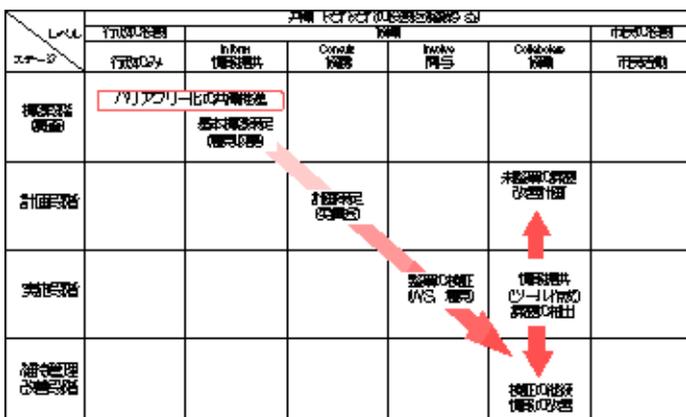


図3 共同の展開